



Photo by Colin Peck © Roberta Bacic

## Stitching Resistance Narratives of Daily Life in Chilean Arpilleras

抵抗を縫う --- チリのキルトにおける触覚の物語

2010年10月12日(火)～16日(土) 大阪大学総合学術博物館



大阪大学  
21世紀  
懐徳堂

主催：大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文科学」  
共催：大阪大学総合学術博物館 協力：大阪大学21世紀懐徳堂

## 本展によせて

アルピジェラは、俳句が詩のなかに占める位置を織物芸術のなかに占めています。そこには普遍的な訴えが個人のかたちをとって表現されています。もとは中央チリの海岸地域の手芸伝統であった壁かけの織物は、政治的な声明を力強くおこなう手段であり言語でもあるものへと、発展を遂げていきました。

アルピジェラも、そして私も、チリで生まれました。私は現在の住まいである北アイルランドを足場として、アルピジェラとともに世界の様々な国を旅してきました——そしていま、ここ日本にいます。みなさんがアルピジェラの物語のなかに意味と喜びを見だし、みなさん自身の感情や経験とのつながりを感じてくれることを、わたしは願っています。

2010年10月  
ロベルタ・バシック  
本展キュレーター

Arpilleras are to textiles what haiku is to poetry; the embodiment of an individual expression with universal appeal. From the craft tradition of a coastal area of central Chile, these textile wall hangings developed into the means and language of making strong political statements.

Both apilleras and I were born in Chile and I have accompanied a selection of them from my present home in Northern Ireland to many other countries in the world -- and now, Japan. My wish is that you will find meaning and enjoyment in their stories and relate them to your own feelings and experiences.

Roberta Bacic  
Curator  
October 2010

## 展覧会「抵抗を縫う --- チリのキルトにおける触覚の物語」

2010年10月12日(火)~16日(土)

大阪大学総合学術博物館

主催：大阪大学グローバルCOEプログラム  
「コンフリクトの人文学国際研究教育拠点」

共催：大阪大学総合学術博物館

協力：大阪大学21世紀懐徳堂

キュレーター：Roberta Bacic

企画：酒井朋子

コーディネート：久保田美生、廣川和花

チラシ・ポスターデザイン：沢村有生

パネル・カタログデザイン：嶺倉豊

パネル・カタログ制作：米田千佐子、渡邊亜由美

映像編集：石田峰洋

キャプション執筆：Roberta Bacic

キャプション翻訳：酒井朋子、鈴菜清白、内藤順子

ラウンドテーブル原稿翻訳：藤井真一

協力：大橋美晴、大山仁実、古川岳志、安岡健一

## ラウンドテーブル「アルピジェラにおけるコンテクストの痕跡」

2010年10月16日(土) 13:30~16:00

大阪大学総合学術博物館3階セミナー室

講師：Roberta Bacic

コメンテーター：太田昌国、北原恵

## ごあいさつ

本展は、南米チリのキルトであるアルピジェラを紹介するものです。アルピジェラはチリの西海岸地域に起源を發する裁縫文化で、端切れを縫い合わせ、人形風のオブジェを組み合わせて日常生活を表現する、三次元的なタペストリーです。

ピノチェト將軍による1973年のクーデターの後、チリでは長く軍政が敷かれました。独裁体制のもとで貧富の差は急速に拡大し、また数多くの人びとが政治犯として逮捕・収監されました。こうした状況下で、ポブラシオン（貧困地区）の女性たちが中心となって、アルピジェラの技法を用いてメッセージ・アートを作り、自分たちの生の実態を国内外に伝える活動がおこってきます。このムーブメントは、日常生活のなかで経験される政治問題や、女たちの抵抗、およびアートを通じた社会メッセージの発信など、こんにち関心を集めるトピックの数々に多くの示唆を与えてくれるものです。

本展は世界各地でアルピジェラ展を開いてきたロベルタ・バシックさんをゲスト・キュレーターに迎え、1970年代~1980年代にチリで作られた作品を中心に展示します。また、アルピジェラ運動に深い影響を受けて各国で作られた作品など、関連するキルトにも目を向けます。素朴な人形たちが一面に踊るアルピジェラを楽しみながら、同時に作品の中に重ねられた幾重もの感情と歴史経験の層に思いを馳せていただければ幸いです。

また本企画は、大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文学国際研究教育拠点」の研究成果の一部を、展覧会という形態を通じて広く一般に公開していこうとする試みでもあります。チリ、ペルー、あるいは南アフリカからはるばるヨーロッパを旅し、いまこうして大阪にあるアルピジェラを前にして、わたしたちが歴史のなかで生きるさまざまな葛藤を、およびその葛藤が生み出す人びとのつながりを、ともに考えてみたいと思います。

2010年10月

企画者 酒井朋子

大阪大学グローバルCOEプログラム

「コンフリクトの人文学国際研究教育拠点」特任助教

## キュレーター略歴

ロベルタ・バシック (Roberta Bacic)

研究者、人権活動家。チリ出身。

チリの民主化後、1990年に発足したレティグ委員会（真相と和解全国委員会）にかかわり数多くの人びとの証言をとる。その後イングランドに移住、人権運動にかかわりつづける。現在は北アイルランド在住。

2007年よりアルピジェラ展のキュレーターとしての活動をはじめ。ケンブリッジ大学、ロンドン帝国戦争博物館、ニューヨーク国連プラザ、ベルリン・チリ大使館など世界各地で展覧会をおこない、アルピジェラを紹介している。

## 謝辞

本展の開催にあたり、下記の諸機関、個人に多大なご協力を賜りました。深く感謝の意を表します。

企画者 酒井朋子

大阪大学総合学術博物館

鈴木清白

大阪大学21世紀懐徳堂

内藤順子

大阪大学文学研究科メディアラボ

藤井真一

古川岳志

石田峰洋

廣川和花

太田昌国

嶺倉豊

大橋美晴

安岡健一

大山仁実

米田千佐子

北原恵

渡邊亜由美

久保田美生

Roberta Bacic

崎山政毅

Máiréad Collins

沢村有生

Martin Melaugh

(敬称略、五十音順・アルファベット順)

## 提供者・提供組織リスト

アイリーン・マクウィリアム (北アイルランド) ----- わたしが大人になったとき

アルバ・サンフェリウ (スペイン) ----- 平和、正義、自由

ガビー・フランガーとライナー・フーレ (ドイツ) ----- 拷問はここで行われる

孤独なクエカ

手の届かない価格

キンダーヒルフェ・チリーボン (ドイツ) ----- アルピジェラ作りとダンボール集め

カインよ、あなたの弟はどこにいるのか

教皇ヨハネ・パウロ、あなたを待っている

共同なべ

苦境はともに

政治犯に自由を

貧困地区での日々

亡命者の帰還

ポブラシオンの週末

行方不明者たちはどこへ？

連帯ヴィカリア

露天商の抑圧

ジャッキー・モンティ (イングランド) ----- 子どもたちはどこ？

サンチャゴでのピラ配り、1979年

ショーン・キャロル (米国) ----- 鎖でつなく

ソニア・コーブランド (北アイルランド) ----- もう昔には戻らない

デボラ・ストックデル (アイルランド) ----- 物語は彼方から

ハイジ・ゲスラー、ペーター・ゲスラー夫妻 (スイス) ----- 公的サービスも受けられない

さようなら、ピノチェト！

ファティマ・ミラリエス (スペイン) ----- インフレーション、独裁、飢饉にNoを

倒れていった者たちへ

ヘレン・ヘロン (アイルランド) ----- 大飢饉

マージョリー・アゴシン (チリ/アメリカ合衆国) ----- 拷問室

リンダ・アダムズ (イングランド) ----- 暴力についての省察

ロバート・ミラー (アメリカ合衆国) ----- 大気汚染はもうたくさん

ロベルタ・バシック (本展キュレーター) ----- 行進する鉱山の女たち

強姦は犯罪だ

ザンビアでの日々

断水

われわれは意見すら言えない

ユルゲン・シャッフアー、マルタ・シャッフアー夫妻 (ドイツ) ----- わたしたちのポブラシオン

## われわれは意見すら言えない

作者不明

チリ / 1980年

### No podemos ni opinar

We can't even give our opinion

Anonymous

Chile / 1980



このアルピジェラはゲスト・キュレーターが2009年7月にドイツで入手したもので、引退した工芸の教師が元の所有者で、彼は27年前にプレゼントされたという。

この作品は、アルピジェラの物語にかつてなら記録されていなかったような政治行動の存在を思い起こさせる、じつに印象的な表現である。1973年に軍事独裁政権が成立したとき、チリは非常事態下におかれた。ピノチェト将軍が交付した新しい憲法は、1980年の国民投票で批准された。「賛成」票は完全な民主主義をもたらすというのが政府のプロパガンダの主張だったが、多くの人はだまされなかった。しかし、すでに7年も続いていた戒厳令下に置かれつづけるよりは、憲法を持った方がましだと論じる人もいた。

このアルピジェラに描かれている場面は、政府に反対した人びとに何が起きたかを克明に表現している。彼らは逮捕され、容赦なく打ちめされた。しかし、それでも多くの人は「反対」票を投じた。

This arpillera was acquired in July 2009 in Germany. It belonged to a retired crafts teacher who had received it as a present around 27 years ago.

It is a very striking image that recalls a political action that does not seem to be previously recorded in the arpilleras literature. In 1973, when the military dictatorship was established, Chile lived under a state of emergency. General Pinochet promulgated a new constitution which was to be ratified by a plebiscite in 1980. Government propaganda said that a 'Yes' vote would bring about full democracy. Many people were not fooled by this propaganda, but some people argued that it was better to have a constitution than to continue under the state of emergency, which had already lasted seven years.

The scene in the arpillera vividly depicts what happened to people who opposed the government: they were arrested and cruelly beaten. But many voted 'No' nonetheless.

## アルピジェラ作りとダンボール集め

作者不明

チリ / 1978年ごろ

### Arpilleristas y cartoneros

Arpillera women and cardboard collectors

Anonymous

Chile / c.1978



ドイツの子供支援のチャリティーであるキンダーヒルフェが入手した作品。この作品の部分写真は、ロンドンのチリ大使館で2010年3月に行われた展覧会「アルピジェラ——タペストリーの声」の招待状の挿絵に用いられた。ポブラシオン貧困地区のなかで見られる陽気にぎやかな希望に満ちた情景と、同時期に進行していた政治的抑圧を描いている。

チリの山々の上に輝く太陽はここでは見えない。けれども、日々の営みは依然として生き生きと描かれている。最初の家では、勤勉なアルピジェラの作り手たちが忙しく働いている。外には道を掃除する人がおり、近所の人びとが玄関先でおしゃべりしている。カルトネーロ（売却するために段ボール収集をする人びと）が、いっぱいになったリヤカーを引っ張って苦勞しながら丘を登っているところから、この地域の貧しさが見てとれる。この作品には珍しく絹が使われている。

不平等に抗して不断にわかちあうコミュニティと希望を映し出した作品である。

A detail of this arpillera, made c.1978 and later acquired by the German Kinderhilfe child support charity, was chosen as the illustration for the invitation to the arpilleras exhibition at the Chilean Embassy in London Arpilleras: Voices on tapestries, March 2010. The arpillera depicts very upbeat, busy, and hopeful scenes in the midst of the poverty of the "población" (poor area) and ongoing political repression.

While the sun does not shine over these Chilean mountains, the scenes acted out below them remain bright. In the first house, we see a group of industrious arpillera makers busily at work. Outside, streets are being swept and neighbours chat at their doors. As a reminder of the area's poverty, we see cartoneros (people who collect cardboard to sell) struggling up the hill with their trailers full. Unusually, silk is used in this piece.

Overall, this piece reflects hope and continued shared community against the odds.

## インフレーション、独裁、飢餓にNoを

作者不明  
チリ



### No a las Alzas / No a la Dictadura / Basta de Hambre

No to inflation / No to dictatorship / Enough of hunger

Anonymous  
Chile

このアルピジェラは、インフレーションと独裁に対して、そして両者の帰結として人びとがこうむっている終わらない飢餓に対して抵抗運動を行うポブラシオンを描いたもの。多くの男たちが「行方不明」になってしまったため、女たちは自分たちだけで立ちあがり、横断幕を掲げている。

衣服に使われている布は、どれもかわいらしく女性的だ。女たちは街頭での抵抗活動をおこなうなかで、女らしさにまつわる伝統的な役割期待に応えると同時に、そうした期待を破つてもいった。

長い間アルピジェラが注意を払われずにいたのは、実にこの「女らしさ」のためだった。独裁体制下のチリではきびしい検閲が行われたが、それにもかかわらず、軍部はしばらくアルピジェラを無視していた。アルピジェラはとるに足らない、女たちの布切れ遊びと考えられていたのだった。8年間、女たちは軍部独裁についてのメッセージをアルピジェラに縫いこみつけた。これらの作品は教会の援助のもと世界中に販売され、チリ内部で経験されている恐怖について、国外の注意を喚起することに成功したのだった。

This arpillera depicts a población (poor neighbourhood) protesting inflation, dictatorship, and their perpetual hunger as a result of both. With so many men "disappeared," the women stand alone with their banner.

The fabric used to create the women's dresses is all very dainty and feminine. In their street protests these women fulfilled traditional expectations of femininity and at the same time violate them.

Indeed, it was their femininity that allowed the arpilleras to go unnoticed for so long. Although Chile was heavily censored at the time of the dictatorship, for a while the military ignored the arpilleras, writing them off as insignificant, as women merely playing with scraps of cloth. For eight years, women embedded their messages about the military dictatorship in these arpilleras. With the help of the church, they were sold to people around the world, effectively alerting those outside of Chile to the horrors going on within the country.

## わたしたちのポブラシオン

サンチャゴのレコレタのワークショップ  
チリ / 1982年



### Vida en Nuestra Población

Life in Our Poor Neighbourhood

Taller Recoleta (Recoleta workshop in Santiago)  
Chile / 1982

尼僧のシスター・カロリーナがサンチャゴで開いていたワークショップの成果として作られたもの。独裁体制が終わりに向かおうとする時期に作られたこの作品は、日常生活の良い部分、悪い部分を双方描き出している。

独裁体制のさなかに作られたアルピジェラよりも幸福な雰囲気を漂わせた作品である。人びとはやはり貧しく、電気を引くことができない（電力線から盗電している電線が見える）。けれども人びとは、生活の中で訪れるもの、去っていくものすべてを祝福している。ある場所では男女が結婚式を挙げている。別の場所では、母親が子供らを抱きしめている。

このアルピジェラにおいては、女たちは孤独ではない。男たちや子供たちが重要な役割を果たしている。アルピジェラを中心になっているのは活発に動き回る子供たちだ。スキップをし、トランポリンで跳ね、ぶらんこで遊んでいる。独裁体制のさなかに作成されたほとんどすべてのキルトと好対照を成している点だ。左側では、女たちが家事に従事しており、人びとが食べものを収穫している。右上には庭仕事をする女たちがいる。右下のロデオ（乗馬・投げ縄などのカウボーイ競技）には、地域内の余暇活動の楽しさが表現されている。結婚式の情景は、未来に向けた希望を示している。

This was created as a result of a workshop run by a nun, Sister Carolina. Created towards the end of the dictatorship, it portrays both the good and bad parts of daily life.

The scene is happier than those created in the midst of the dictatorship. Though the people are still poor and unable to afford their own electricity (note the wires tapping into the main power line), they are celebrating all the comings and goings of life. In one scene, a couple is being wed. In another, mothers hug their children.

Women are not alone in this arpillera. Men and children play prominent roles. Children's activities dominate the whole of the centre of the arpillera - skipping, jumping on a trampoline, and playing on the swings. This is a complete contrast to nearly all the quilts produced during the dictatorship. The left side shows women undertaking household chores and people cultivating their food crops. Women are also seen gardening (top right). The rodeo on the right shows us the enjoyment of communal and leisure activity and the wedding scene is a sign of hope for the future.

## わたしが大人になったとき

アイリーン・マクウィリアム  
北アイルランド



### Will there be poppies,daisiesand apples when I grow up?

Irene MacWilliam  
Northern Ireland

北アイルランドのキルト製作者、アイリーン・マクウィリアムの手になる二番目のアルピジェラ。彼女の作品のなかには「共通の犠牲:3000以上の死者」と題されたものがある。これは、世界中から集められた3161の赤い布を縫い合わせ、その切れはしのそれぞれを、1969年から1994年のあいだに北アイルランド紛争によって亡くなった人びとに見立てたものだった。この「わたしが大人になったとき」も、負けず劣らず考えさせられる作品である。

孫たちを心配する作者の気持ちと、気候変動と変わりゆく環境条件に対して彼ら孫世代が負わされる不安と責任の重さを表現した作品。このアルピジェラには、世界中でわたしたちに影響を及ぼしている問題が、子どもの言葉と世界を通じて表現されている——未来にも、花やリンゴはあるのだろうか？

マクウィリアムのこまかなステッチと、時間の流れをあらわす砂時計と墨色の足跡の象徴表現によって、このキルトは記憶に鮮やかに残る忘れがたい作品となっている。本展のために特別につくられた作品。

This is only the second arpillera made by the renowned Northern Irish quilter Irene MacWilliam. Her work includes a quilt – Common Loss-3000 + dead, made up of 3161 different pieces of red material from around the world and representing all of those killed between 1969 and 1994 in the Northern Irish conflict. This piece is no less thought provoking and imaginative.

It expresses the maker's own worries for her grandchildren and the burden of anxiety and responsibility they bear for climate change and an ever-changing environment. In this arpillera, she reflects the concerns affecting us globally via the language and world of a child – will there still be flowers and apples in the future?

MacWilliam's detailed stitching and symbols of passing time and carbon footprints make this piece a vivid and hard-to-forget work of art. It has been specially made for this exhibition

## カインよ、あなたの弟はどこにいるのか

作者不明  
チリ / 1983年ごろ



### ¿Caín, dónde está tu hermano?

Cain, where is your brother?

Anonymous  
Chile / c.1983

この独特のアルピジェラは、わたしたちを屋内へと導く。殺人や行方不明、拷問、亡命など人権侵害の問題に取り組んでいた教会グループの活動の様子に、見る者をより接近させる手法である。ニューヨークで開かれた「戦争を織る」展（2005年）のカタログの中で、やはりニューヨークのユダヤ博物館で開かれた「記憶の芸術：かつて行われた大虐殺の記録」展のキュレーターであるジェイムズ・ヤングは、以下のように述べた。「この作品は、恐ろしい記憶を外側から表現している。また、そのような記憶を通過するための時間と場所とを、物語る人の心の中にもたらしめている。」

わたしたちもまた、聖書のかたわらにキャンドルが見える机の、その周囲に立つよういざなわれている。一人の女が何かを朗読している。それはたとえば、拘留され行方不明になった者たちについての思い出かもしれない。彼らの写真が壁に貼られているのが見える。また別の女が、自分も話したいと手を挙げています。他の男たちと女たちは話を聞いている。この集会は、聖書のある有名な言葉に応答することを参加者たちに求めるものだ——「カインよ、あなたの弟はどこにいるのか」。

コミュニティの強い一体感を呼び起こす情景である。

This unique arpillera brings us indoors. The setting allows us to come close to the way the church groups in Chile worked around issues of human rights violations, be those killings, disappearances, torture, exile or others. In the catalogue to the "Weavings of War" exhibition (2005), James Young, curator of "The art of Memory: Holocaust Memorials in History", says: "This needlework expresses such memories outwardly and it gives the storyteller an inward time and space to work through such memory" (Ariel Zeitlin Cooke & Marsha MacDowell eds. 2005, "Weavings of War: Fabrics of Memory", Michigan State University, p21).

We are almost invited to stand around the table where we can see the candles next to the Bible. A woman is reading something: it could well be information recollected about the detained disappeared people they are looking for and of whom they have photos on one of the walls. Another woman has lifted her hand to signal that she wants to speak. Other men and women are listening. The meeting has challenged the participants to respond to a well-known quote from the Bible: Cain, where is your brother?

The scene evokes a deep sense of community.

## 教皇ヨハネ・パウロ、あなたを待っている

作者不明

チリ / 1986年

### Juan Pablo te esperamos

John Paul we are waiting for you

Anonymous

Chile / 1986



1987年3月31日から4月13日にかけて、教皇ヨハネ・パウロⅡ世がチリ、アルゼンチン、ウルグアイを訪れた。チリはカトリックの国であるため、これは人びとにとっても大きな意味を持つ出来事だった。

このアルビジェラには横断幕を掲げた女たちが描かれている。旗のひとつには「平和、正義、まもなく来たる」と書かれ、ほかの旗には「ヨハネ・パウロ、わたしたちはあなたを待っています」と書かれている。地方の教会から多くの支援を受けていた女性たちが、教皇の訪問に社会政治的な期待を抱いていたことを、このアルビジェラはあきらかにしている。このような行動は国内社会のあらゆる場所から起こってきており、また国際社会からの圧力もあって、ピノチェト将軍は1989年に国民投票を呼びかけることとなった。この国民投票での反対票により、ピノチェトは退陣した。(抄訳)

From March 31 to April 13, 1987 there was a historic visit of Pope John Paul II to Chile, Argentina and Uruguay. Chile being a Catholic country, this visit was of major significance to the people.

In the arpillera, we see women carrying banners. One reads: "Peace, Justice, come soon", and the other says "John Paul we are waiting for you". This classic arpillera makes it clear that, having had so much support from the local church, the women had socio-political expectations from the pastoral visit of the Pope. Actions such as theirs from all parts of society internally and pressure from international sources made general Pinochet call for a plebiscite in 1989. It was this anti vote that deposed him.

In the wake of the military coup of September 1973, the church had established an office for the defence of human rights. Initially, the Protestant and Jewish communities were also involved. Later reorganised under the exclusive sponsorship of the archdiocese of Santiago as the Vicarage of Solidarity (Vicaría de la Solidaridad), this organisation continued to receive funds from international sources and valiantly collected information on human rights violations during the nearly 17 years of military rule. Its lawyers presented thousands of writs of habeas corpus, in all but a few cases to no avail, and provided for the legal defence of prisoners. The church also supported popular and labour organizations and called repeatedly for the restoration of democracy and for national reconciliation.

In these circumstances, women were encouraged and inspired to make their own direct and reasonable demands.

## 露天商の抑圧

作者不明

チリ / 1985年ごろ

### Represión a vendedores ambulantes

Repression of street vendors

Anonymous

Chile / c.1985



この作品はアルビジェラとしては珍しい場所を描いており、共同住宅の近代的なスカイラインが背景となっている。描かれているのは露天商で、彼ら彼女らは政治的な活動にかかわっているわけではない。国家が露天商を追い払いたがっているだけだ。そしてこの作品は、貧しい人々が日常生活のなかで感じていた（いまでもしばしば感じている）、恒常的な抑圧を表現している。

売り物が入ったビニール袋や新聞を抱えて逃げまどう露天商は、細部まで緻密に描かれており、無垢な雰囲気がある。それは右奥の、露天商を追い散らすぶかっこうな黒い放水砲とは対照的だ。放水砲には特徴がなく、中に警察がいる気配もない。露天商が無害に見えるだけに、とても脅迫的に感じられる。

この技法によって、人々の無力さと、顔のない権力の残酷さとの対比が表現されている。こうした状況にある人びとの感情を伝えてくれるだけでなく、作品を見る者の中に同様の感情を呼び起こす技法だ。

放水砲から噴き出す水の表現方法に目を向けてほしい。アルビジェラの作り手の多くが、水を表現するために白色のしつけ糸を使っている。

The location of this arpillera is unusual in that it is set against a modern skyline of blocks of flats. The figures are street vendors. They are not involved in political action. The state just wants to get rid of them and this captures the constant oppression which poor people felt (and still often feel) going about everyday life.

The close detail with which the fleeing vendors are depicted, with their newspapers and plastic bags containing the goods they have to sell, give them a sweet innocence in contrast to the black hulking shape of a water cannon in the bottom right which is being used to disperse them. It is totally featureless and there is no sign of the police inside. It is very threatening while the vendors appear harmless and unthreatening.

The technique captures the contrast between helplessness of the people and the faceless brutality of the authorities. It does not only convey the emotion of being in that situation, but it also evokes it in the observer.

Notice the way that the water jet from the water cannon is depicted. A number of arpillera artists have used the same technique with tacked white thread to represent the water.



## 連帯ヴィカリア

作者不明  
チリ

### Vicaría de la Solidaridad

The Vicarage of Solidarity

Anonymous  
Chile



細部まで手の込んだこのアルピジェラは、重要な人権団体である「連帯ヴィカリア（連帯の司祭館）」を描いている。チリ人枢機卿のラウル・シルヴァ・エンリケスは、ピノチェトによる1973年のクーデターの直後、人権問題のサポートや各種ワークショップの援助、救急措置や集会所の提供、およびアルピジェラのワークショップの企画など、さまざまな支援活動をおこなっていた。そのなかで連帯ヴィカリアが設立されていった。ある意味では、ピノチェト独裁の抑圧的な政策の結果として生み出されたとも言える団体である。エンリケスはこうした方法で、貧しく孤立した人々を、厳しい時代に助けていたのだった。

このアルピジェラも、連帯ヴィカリアが設けたワークショップで作られた。司祭館でおこなわれていた多くの活動が描かれている。法的弁護を求める運動、亡命、政治犯、行方不明者にまつわる活動、および人身保護令状の提出を裁判所に求める運動などである。

多くの伝統的なアルピジェラと同様に、背景には山々と太陽が描かれている。前景には、地域のニーズにこたえるため司祭館が館の外で組織していった支援活動も描かれている。枢機卿エンリケスその人が言ったように、わたしたちは「生きる務め」のためにここにある。

This detailed arpillera depicts an important human rights association born from the repressive tactics of the Pinochet dictatorship. It represents the "Vicariate of Solidarity" founded by the Chilean Cardinal Raúl Silva Henríquez soon after Pinochet's 1973 coup in his efforts to support human rights issues, facilitate workshops, provide first-aid, space to meet and to set up arpillera workshops. In this way he helped the poor and isolated during the hard times.

The arpillera itself was made in a workshop run by the vicarage and illustrates a number of the activities which took place inside the church buildings: actions regarding legal defence, exile, political prisoners, the disappeared, and the presentation of habeas corpus to the courts.

As in most traditional arpilleras this piece depicts the mountains and the sun which act as backing to the section that tells us the activities the Vicarage facilitated outside their buildings and in support of organizational community needs. As the Cardinal explained it himself, we are here "In the Service of Life"

## 共同なべ

作者不明  
チリ / 1982年ごろ

### Olla común

Soup kitchen

Anonymous  
Chile / c.1982



このカラフルでいくぶん子どもっぽいアルピジェラは1980年代初期のもので、貧困者のための「共同なべ」で食事する子どもたちを描いている。この共同なべは、独裁政権下、もともと恵まれない人びとを助けていたある教会によって運営されていた。教会の前の大きなテーブルのまわりでは、食べものが配膳されるのを我慢よく待つよう女性が子どもたちをまとめているようだ。背景には、共同なべを運営する教会と屋外調理場がある。

おそらくこのアルピジェラを縫った女性は、生計を立て、自分を表現し、そしてごく普通の人びとの生活が困難だった時代について証言する必要性にせまられていたのだろう。

この作品は、縫製技術こそ拙いものであるが、コンセプトとデザインによって、当時の状況と雰囲気を伝えることに成功している。この作品を見ることで、わたしたち自身が、こんにち世界のいたるところで繰り返されているコミュニティの窮乏化という状況の証人となってゆく。

This colourful and somewhat childlike arpillera from the early 1980s depicts a scene of children being fed at a soup kitchen run by one of the churches that helped the most disadvantaged during the dictatorship. Around the big table in front of a church, a woman seems to be organising the children so that they are waiting patiently for their food to be served. At the back we can see the church itself and the area where the meals are prepared in the open air.

In all probability, the woman who stitched this arpillera was driven by the need to earn a living, to express herself and to bear witness to a difficult time in ordinary people's lives.

The sewing technique of this piece, though poor, manages by the concept and design to convey to us the situation and atmosphere that prevailed at the time. It makes us a witness to the community's impoverishment, circumstances which are repeated in many places of the world today.

## 苦境はともに

作者不明

チリ / 1983 年ごろ

### Juntos en la adversidad

Together in adversity

Anonymous

Chile / c.1983



この作品は、アルピジェラが連帯運動の一環としてカナダ、アメリカ合衆国、ヨーロッパでさかんに売られていた時期に作られたものである。この連帯運動の目的は、アルピジェラ製作者たちの作品を世に知らしめ、チリで起きていることを告発し、独裁体制のもとで窮乏と苦難を強いられる貧しい女性たちとその家族に収入を提供することにあった。

この作品には、アルピジェラの作り手のコミュニティが、どのように工場の閉鎖と経済的な制約に対処したかが描かれている。人びとはみな、飢えた者に食べものを提供するため設置された共同なべに貢献すべく、忙しく動きまわっている。焚き火のために枝を運ぶ者がおり、袋に何かを入れて運ぶ者がいる。二人の青年が自分たちの労働条件について訴えるピラを配っている。

多くの古典的なアルピジェラと同様、この作品は布のはぎれで作られている。背景の山々が迷彩模様の布で作られているのは珍しい。変わりなくそこにありつづけるアンデスの山々を描く、特長ある手法といえる。

This piece was made at the height of the period in which arpilleras were sold in Canada, the USA and Europe as part of a solidarity campaign. The aim was to promote the work of the arpilleras, denounce what was going on in Chile, and help provide an income for the impoverished women and their families who were suffering deprivation and hardship under the dictatorship.

The piece depicts the way the maker's community dealt with the closure of factories and economical restraints. The scene shows busy people, all doing something to contribute to the soup kitchen that has been set up to feed the hungry. Some people are bringing sticks for the fire and others a little bag of something. Two young men are distributing leaflets about their working circumstances.

Like most classical arpilleras, this one is made of scraps of fabric. It is unusual in that the mountains are made of camouflage material, which is a unique way to depict the ever-present Andes.

## 行方不明者たちはどこへ？

作者不明

チリ / 1980 年代後半

### ¿Dónde están los desaparecidos?

Where are the disappeared?

Anonymous

Chile / Late 1980s



このアルピジェラはサンチャゴで、連帯ヴィカリアのワークショップによって製作された。伝統的なアルピジェラらしく、空に太陽が浮かんでいる。けれども、通常なら一面真っ青なはずの空には、大きな二つの雲が浮かんでいる。丘は見えない。この作品が、チリの首都である繁華なサンチャゴを描いたものであるためだ。カラフルな衣服に身を包んだ女たちの一団が、最高裁判所の前で抵抗活動をおこなっている。掲げられた横断幕には、「拘留者はどこに消えた？」と書かれている。素通りしていく人はあまりいない。この行動は、行方不明者がいる状況に対して人びとの注意を高めることをねらいとしたデモなのである。

右側には緑のシルエットが二つある。チリの警官の制服の色だ。この人物は武器を持ってパトカーの横に立っているが、その表情は描かれていない。個人個人ではなく、抗議の声をあげる者たちを抑圧する制度を表現したもののなのだ。

「修復と和解のための国立事業団」により 1996 年に発行された統計によれば、チリで行方不明になるか、死刑になった人びとは、公式に認定された数だけで 3,197 名に及ぶ。2010 年の現時点では後継の委員会が調査にあたっており、さらに数が増える予想される。(抄訳)

In this traditional arpillera that was made by one of the workshops at the Vicaria de la Solidaridad, the sun is in the sky, but there are also two large clouds showing, in what is normally a clear blue sky. We cannot see the hills as the scene takes place in the midst of busy Santiago, the capital of Chile. A group of women dressed in colourful dresses are protesting in front of the Courts of Justice. They are holding a banner that reads, 'Where are the detained disappeared?' We cannot see many passers-by; the action centres on this demonstration and aims to promote awareness of the situation.

On the right hand side are two green silhouettes, corresponding to the colour of Chilean police uniforms. The figures are armed and standing next to a police car, but have no features. They do not represent individual men, but the institution that represses the protestors.

The total number of officially recognised disappeared and executed people in Chile amounts to 3197, according to the statistics issued by the National Corporation of Reparation and Reconciliation at the end of 1996. At this stage, 2010 a follow up commission is at work, so official numbers will raise.

The Chilean Truth Commission and follow-up bodies were set up with the aim of finding out what happened to each disappeared person, trying to find the remains of the bodies where possible, or at least passing on information to the next of kin. Reparations have been put in place for directly related relatives of acknowledged victims.

## 物語は彼方から

デボラ・ストックデール  
アイルランド / 2010年

### From Far away come their stories

Deborah Stockdale  
Ireland / 2010



このアルピジェラは2010年5月にベルリンのチリ大使館で開かれた「過去から現在へのアルピジェラ」展のために作成された。「文化使節としてのアルピジェラ」という展覧会テーマに応答した作品。作者のデボラ・ストックデールは次のように言っている。

「チリなどで作られた伝統的なアルピジェラが、とても長い旅を経て西ヨーロッパのわたしたちに届いたことについて考えている中で、このデザインは生まれてきました。チリのような国々の抑圧的な状況についてアルピジェラは語り、わたしたちに色々なことを再考するよう訴えてきます。けれどもアルピジェラを見た人びとはみな、なんらかの応答を返したのです。たとえばその布製品としての特徴やデザイン上の観点であったり、その色合いであったり、あるいはナイーブでありながらも本質的には正確な、人間性の描き方への反応でもありました。

「わたしがこの作品に描こうとしたイメージは、アルピジェラが故郷からはるばる旅をして世界の各地を訪れた、その物理的な軌跡と、観念上の軌跡の双方です。今回のさらなる旅路によって、再びたくさんの人びとが、象徴的に、そして空想的に、彼方の人びとと人間的なレベルで結びつきました。彼らが置かれている状況はおそらく困難で、またわたしたちとは異なるものかもしれませんが、人間の生の条件を生きているという意味で、そこになんら変わりはないのです。」

This arpilleras was made for the May 2010 exhibition, 'Arpilleras de Ayer y de Hoy (Arpilleras from yesterday and today)', at the Chilean Embassy in Berlin. It was created in response to the theme of 'ambassadorial arpilleras'. Deborah has said:

"The design developed as I thought of the long path that the traditional arpilleras from Chile and other countries have travelled to reach us in Western Europe. The stories that these arpilleras told about repressive conditions in those places were often challenging and provoking, but all viewers have responded to the textural and design aspects, their colours and the often naïve but essentially accurate portrayal of humanity in the arpilleras. "My image tries to depict both the physical path that the arpilleras have travelled from their homelands to all points of the globe, as well as their metaphysical journey. This other journey, through symbols and imagery, has enabled many people to connect on a human level through arpilleras to other people from far away and in perhaps far differing and challenging circumstances, but in all cases emphasising the human conditions we all live in".

## 鎖でつなぐ

作者不明  
チリ / 1980年代後半

### Encadenamiento

Women chained to parliament gates

Anonymous  
Chile / Late 1980s



この印象的な作品は、チリの歴史における大きな悲劇のひとつ、「行方不明者」についてのもの。女たちは議会の門に鎖で自分を縛りつけている——自分たちの苦しみを、そして行方不明となった身内の居場所を自分たちがどうしても知りたいということ、人びとに気づいてもらうために。そして、行方不明者の居場所を知らないと言張る政府に抗議するために。

女たちに声援を送る群衆がいるなか、車で通り過ぎ、日常生活を続ける人びとがいる。彼らは目の前の光景には動じていない。これは、多くの人びとが現実に行き起きていることを認めず、真実から目をそらしていたという、チリ社会の分裂を強調する表現である。他の多くのチリのキルトとは異なり、山脈と輝く太陽は描かれていない。

この作品は、1988年のチリの国民投票のさい、国際監視員の一人が購入したものである。この国民投票によって独裁体制は終焉をむかえた。

This striking piece from the late 1980s reflects one of the great tragedies of Chile's history – the Disappeared. The women depicted have chained themselves to the parliament gates to draw attention to their plight, their need to know where their 'disappeared' loved ones are, and to protest at the government's denial of any knowledge of their whereabouts.

While a crowd cheers the women, others go on with their daily lives driving past, immune to the scene they are witnessing. This underlines the divisions in Chilean society which saw many turn their eyes from the truth rather than recognise what was happening. Unlike most other Chilean examples, the mountains and bright sun is not depicted.

This piece was purchased by an international monitor of Chile's 1988 plebiscite, which saw the end of the dictatorship.

## 行進する鉱山の女たち

マリア・エレラ  
ペルー / 1985年

### Marcha de las mujeres de los mineros

March of the miners' women

María Herrera from Mujeres Creativas workshop  
Peru / 1985



アリエル・ゼトリン・クックは、ニューヨークの「戦争を織る」展（2005年）のカタログで次のように述べている。「ペルーのアーティストたちは、多くをチリのアルピジェラから借用していた。たとえば、絵画的なパッチワークを用いて政治運動について伝えていくというアイデアや、教会教区をワークショップにしていこうこと。それから、人権団体や外国の芸術グループとの間にアルピジェラを取引する国際的な関係を築いていくことも。（中略）加えてペルーの作り手たちは、それまでになかった形態の布製品を自分たちで作成し、大胆な図画構成と新たな技法をもたらした」（Ariel Zeitlin Cooke & Marsha MacDowell eds. 2005, *Weavings of War: Fabrics of Memory*, Michigan State University, p21）。

本アルピジェラについて、作り手であるムヘレス・クレアティヴアス・ワークショップのマリア・エレラは次のように述べている。「多くの男や女や子どもたちが、自分を犠牲にしてこのような行進をおこなっているのです。鉱山の恥ずべき労働条件に対して抗議するために、何日もかけてリマをめざし出身地から歩く。リマに入るやいなや、人びとはお金を集め、生き延びるために共同なべの炊き出しを組織するのです。ひどい弾圧も受けます。このことを記録する必要性を、わたしは感じたのです。」（抄訳）

We can clearly see in this piece that the maker, like other arpilleristas from Peru, adopted much from the Chilean tradition. As Ariel Zetlin Cooke says: "The Peruvian artists borrowed much from the Chilean arpilleristas: the idea of using pictorial patchwork as a vehicle for political activism, the use of church parishes for workshops, and even the use of the same overseas trading relationships with human rights organisations and international arts groups... They made an unfamiliar textile form their own, contributing boldly graphic compositions and new techniques" ("Weavings of War", p21).

A few months ago, Maria Herrera said in a phone call about her work that marching was one of the ways Peruvian men and women protested against appalling working conditions and human rights violations. With regard to this arpillera, she said: "Many men, women and children do these sacrifice marches, walking for many days from where they come from and heading to Lima so as to protest against the shameful working conditions in the mining camps. Once in Lima they collected money and organised soup kitchens in order to survive. They also have to face repression. I felt the need to document this" .

## もう昔には戻らない

ソニア・コーブランド  
北アイルランド / 2009年

### No going back

Sonia Copeland  
Northern Ireland / 2009



30年の紛争に平和をもたらした北アイルランド聖金曜日合意の締結から10年以上が経過した。過去の問題が二度と繰り返されないようにという市民社会の願いは根強い。しかし2009年初頭に2つの事件が起こり、あわせて3名の死者を出した。多くの人びとがこれに抗議するため街頭に集まった。

ソニアは長い間キルトを作ってきたが、これが彼女の最初のアルピジェラである。この作品についてソニアは次のように語る。「私の作品は、ベルファスト市役所と、その前で行われた（カトリックとプロテスタントの）両コミュニティによるデモを描いています。このデモはスティーヴン・キャロル巡査、マーク・クインジー工兵、パトリック・アシムカル工兵が、いわゆる「レパブリカンのテロリスト」に殺害された後に行われました。犠牲者とその家族への支援と連帯を示したこのデモは、私にとって重要でした。私自身も、紛争がもっともひどかった時期に北アイルランド警察に勤めており、4回にわたってテロリストの攻撃にさらされたからです。平和は多くの痛みと苦しみの結果として勝ちとられたものですが、それがふたたび、あっという間に奪われてしまうかのように私には感じられました。このデモを通じて私は、なんであろうと、何者であろうと、私たちの世代から奪われた平和な生活を子どもたちから奪わせはしないと決意したのです」。

More than ten years after the signing of the Good Friday Agreement that paved the way to peace after 30 years of conflict, civil society continued to hope that the problems of the past would never return. But, early in 2009, two incidents caused three deaths and people took to the streets to protest about them.

Sonia has made quilts for a long time but this is her first arpillera. Sonia said, "My piece of work shows the Belfast City Hall, and in the foreground a representation of one of the cross-community demonstrations which followed the murders of Constable Stephen Carroll and Sappers Mark Quinsy and Patrick Asimkar by so called 'Republican terrorists.' This demonstration of support and solidarity for the victims and their families was important to me personally, as I had served in the Royal Ulster Constabulary during the worst years of The Troubles, and had suffered as a result of terrorist attacks on four occasions. It seemed to me that the peace won as a result of so much pain and suffering, was once again to be snatched away. At the demonstration, I resolved that nothing and no-one would steal from my children the right to a peaceful life, which was stolen from me and my generation."

## ポブラシオンの週末

作者不明

チリ / 1970年代後半

### Fin de semana en un población

Weekend in a población

Anonymous

Chile / Late 1970s



キンダーヒルフェ・コレクションの一つであるこの作品は、チリの山々と、太陽の輝く大きな青い空を描いている。この大きなアルピジェラは、ポブラシオン（貧民地区）の日常を映し出す。

ポブラシオンの力強いエネルギーは、ここでは活気のある雑踏として表情豊かに描かれている。前方右では、粘土製のオーブンでつくられたチリの伝統料理であるエンパナーダを、人びとがテーブルのまわりで準備している。また、遊んでいる子どもたちや、川で釣りをしている男たちも見える。その川で女たちが服を洗濯したり、毛布のほこりをはたいている。共同なべが貧しい人びとにいそがしく食べものを提供しているのも見える。しかし変わらず太陽は、彼ら彼女ら全員の上に、等しく輝いている。

This piece made in the late 1970s, from the Kinderhilfe collection, again depicts the mountains and wide open blue skies of Chile with a bright sun shining down. This large arpillera reflects the daily life within a población (poor neighbourhood).

The vibrant energy of the población is expressively illustrated here as a hive of activity. To the right of the foreground, we see people around a table preparing the traditional Chilean food of empanadas, which are cooked in the clay oven beside it. We also see children playing and boys fishing at the river; women are washing their clothes and beating the dust from blankets. We see a busy soup kitchen providing for the very poor. However, the sun still shines down on all of them equally.

## 公的サービスも受けられない

作者不明

チリ

### No tenemos acceso a los servicios públicos

We have no access to public services

Anonymous

Chile



このチリのアルピジェラは、サンチャゴのシャンティタウン（貧民区）にあるプロテスタント教会が設立した地域ワークショップで作られた。1970年代後半に作成され、チリの民衆との連帯運動に関わっていたスイスの一夫妻が入手した。この夫妻はほかにもいくつかのアルピジェラを購入し、ヨーロッパに持ち帰って友人たちに贈った。このようにして、彼らはチリで何が起きているかについて、国際的な関心を引き起こしていった。

このアルピジェラの製作時期は、司法大臣モニカ・マダリアガの任期によっても推測できる。彼女は1977年4月から1983年2月までこの任にあり、独自の恩赦法を起草した。1973年9月11日の軍事政変から1978年3月10日に国が鎖国体制を解くまでの間に、罪を犯したか、犯罪に協力したか、あるいは犯罪を隠匿したすべての者を、無罪とする法律だった。

このアルピジェラはその恩赦法にふれてはいない。だが不利な立場にある人びとの生活の様子をはっきり表現しており、またその要因に直接の言及をおこなっている。医療機関、大学、最高裁判所の扉、および建築現場などに縫われたバツ印は、これらが一般の人びとに開かれていなかったことを表している。デスクで働いている女性大臣の横には次のように書かれている。「教育大臣、祖国への裏切り」。また、「これは何なのだ？」という言葉も縫いこまれている。他に見ることができるのは、鍬で地面を掘って生き延びようとする人びとだけである。

This Chilean arpillera was made by a community workshop set up by a Protestant Church in the shantytowns of Santiago. It was done in the late 1970s and acquired by a Swiss couple involved in solidarity work with Chile. They also bought other pieces which they brought to Europe and gave as presents to friends. In this way, they increased awareness of what was going on.

We can also date it by the direct reference to Monica Madariaga, Justice Minister from April 1977 to February 1983, who personally drafted the Amnesty Law. It exculpated from criminal responsibility all persons who committed crimes, were accomplices in crimes or covered up crimes committed between the day of the military coup, September 11, 1973 and March 10, 1978, when the state of siege was lifted.

Though it does not refer to the amnesty law as such, it clearly shows the day to day situation of disadvantaged people and also makes direct references to the causes of the situation. The crosses stitched on the doors of health facilities, university, the Supreme Court, building sites, and others show that ordinary people do not have access to these services. The woman minister is shown at her desk, next to it the words: Minister of Education, betrayal to the fatherland. It also says: What is this? The only other characters are people having to dig with their spades to survive.

## 強姦は犯罪だ

マリア・エレラ  
ペルー

### Violar es un Crimen

Rape is a crime

María Herrera from Mujeres Creativas workshop  
Peru



1980年から2000年にかけて、ペルーでは政府軍とセンデロ・ルミノソ（「輝ける道」）の間で内戦が行われていた。貧困と恐怖は内戦の主な要因であり、またその帰結でもあった。

この作品を作ったムヘーレス・クレアティヴァス・ワークショップのマリアは言う。「1985年、アヤクチュォでたくさんの人びとが殺され、女たちは強姦されました。でも誰も抵抗しなかった。わたしたち二つのグループが、リマのコマンド・コンジュント（合同軍司令部）の前でデモを行うと決めたのは、同じことをアヤクチュォで行うのは誰にとっても危険すぎるからです。わたしたちは『強姦は犯罪だ』と書いた横断幕をもち、多くの人が死んだことを伝えるため、花を十字型に置きました。同じ夜、わたしたちはルリガンチョの政治囚の大量殺害に対する抗議行動を行いました。その後5人が自分たちの行動についてアルピジェラを作り、こうした暴虐をゆるさないと示すことに決めたのです。」（抄訳）

From 1980 until 2000 Peru fought an internal war. The main actors were Government Forces and Shining Path. Poverty and fear were the main factors that caused the war and were also a consequence of it. After the defeat of Shining Path, a Truth and Reconciliation Commission was set up in 2001 to investigate what had actually happened. Its mandate ended in 2003.

Part of the Commission's remit was to write the history of the conflict, bringing together all the available evidence available, making it public and accessible. Minimal reparation policies were introduced for those with human rights violations. Its most striking findings were as follows: 69,280 "dead/disappeared" ; 40% of whom were from Ayacucho; 85% were from the poorest districts; 68% had no secondary education; 79% were from rural areas, mostly indigenous Quechua, 16% of the total population; 4000 burial sites were identified. For more information see <http://www.cverdad.org.pe/ingles/pagina01.php>

It is remarkable that in the midst of this, a group of women living in the poor areas of Lima, many displaced from other areas, dared to raise their voices and act. María who made this piece says, "In October 1985 many people were killed in Ayacucho and women were raped, but nobody protested. Two groups of us decided to demonstrate in front of Comando Conjunto (Joint Military Command) in Lima since the people actually living in Ayacucho felt themselves too vulnerable to do so. We took a banner that read 'Rape is a crime' and we placed flowers shaped as a cross to make it known that so many had died. The same night we protested about a large-scale killing of political prisoners in Lurigancho. Five of us decided to make an arpillera of our action to show we do not condone such brutality."

## 暴力についての省察

リンダ・アダムズ  
イングランド / 2009年

### Reflections on violence

Linda Adams  
England / 2009



リンダ・アダムズは、2008年10月のケンブリッジでのアルピジェラの展覧会に参加した。以来、彼女は多くのアルピジェラを製作し、世界のさまざまな場所で起きている事柄についての関心や思いを表現している。「自分の手でどのように縫いものをするのかは知っていました。けれどもケンブリッジの展覧会を見て、そこでの発表を聞いて、どうやって自分の心で縫うのかを学んだのです。」

この作品に描かれているのは、北京に向かう聖火リレーがロンドン市内を通過したさいに行われた、フリー・チベットの抗議行動である。この聖火リレーは、国家がスポーツをもプロパガンダに悪用していることを示す例だった。同時にこのリレーは、チベットでの中国の行いについて、そして聖火リレーのロンドン通過を許可したイギリス政府の決定について、意見を表明する機会を人びとに与えたのだった。

前方では、青く描かれた中国の公安に囲まれて、白い聖火ランナーが走っている。そのまわりには蛍光色のジャンパーを着た警官がいる。停止線の後ろでは、抗議行動の参加者がスローガンを掲げており、うち一人はリレーの経路に侵入している。後方には救急隊が待機している。（抄訳）

Linda Adams attended the exhibition of arpilleras in Cambridge in October 2008 as part of the Festival of Ideas. Since then, she has made a number of arpilleras which portray her concerns and feelings about current issues in different parts of the world. She has said, "I knew how to sew with my hands but seeing the Cambridge exhibition and listening to the presentation taught me how to sew with my heart." Her style captures the spirit of the Chilean arpilleras and is marked by very fine details and the innovative use of materials.

"Reflections on violence" is a good example of her work. It shows the Free Tibet protest in London when the Olympic torch was carried through the city on its way to Beijing. The event demonstrated how states use and abuse sport, like many other things, for propaganda purposes. At the same time, this event provided an opportunity for people to express their opposition to what China is doing in Tibet, and to the British Government's decision to allow the torch to travel via London.

The torch carrier in white is in the foreground, surrounded by Chinese security personnel in blue. Around them are the police in Day-Glo jackets. Behind the barrier, the protestors are making their views clear; one has got onto the torch's route. In the background the emergency services stand by.

Linda was amazed that repression against protestors was used in London.

## 亡命者の帰還

ヴィクトリア・ディアズ・カロ  
チリ / 1992年



### Retorno de los exiliados

Return of the exiles

Victoria Diaz Caro  
Chile / 1992

このアルピジェラは、亡命によって引き裂かれた家族の幸せな再会を描いたもの。戦争や紛争と同様に、亡命や強制退去は政治暴力の直接の帰結であり、家族にとっても社会全体にとっても重大な影響をおよぼすものだった。

チリの亡命は様々な形態をとった。1973年の軍事政変のさいには、サルバドル・アジェンデ政府にかかわっていた多くの人びとが、協力的な他国の大使館に隠れて迫害や人権侵害を逃れた。アンデスを超えたり、他の経路を通じて逃亡する者もいた。刑務所に収容され、拷問された後、国外に放逐される人びともいた。チリ国籍を奪われた者さえいた。

独裁体制が終わった後、亡命者たちが帰還するにともない、新しい問題もたちあらわれた。問題は深刻であったため、1990年にいわゆる「移行期民主制」が確立したさい、新しく選出された大統領パトリシオ・エイルウィンが解決に取り組んだ。「帰国者のための国家局 (Oficina Nacional del Retorno)」が設けられ、登録者の数は52,557人に及んだ。亡命した人びとは世界中の70もの国に暮らしており、スウェーデン、アルゼンチン、カナダ、フランス、ドイツといった国々からの帰国者ももっとも多かった。(抄訳)

This arpillera shows the happy reunion of a family group that had been separated by exile. Like in most wars and conflicts, exile or displacement are immediate consequences that affect the core of social life, either that of a family or the larger society.

Exile in Chile took place in a number of different ways. At the time of the military coup in 1973, many people who were part of Salvador Allende's government took refuge in sympathetic embassies to escape persecution and human rights violations. Some escaped by crossing the Andes or using other routes. Others, after being imprisoned and often tortured, were expelled and had to leave the country. Other people had to take what was called 'economic exile', as they had been fired from work and had no way to survive in their homeland with their families. Some were even deprived of their Chilean nationality.

After the end of the dictatorship, returning home brought new problems. The magnitude of the problem meant that in 1990, on the establishment of what is called 'transitional democracy', the newly elected president Patricio Aylwin tackled the issue. The 'Oficina Nacional del Retorno' (National Office for the Return) was created and the number of people registered reached 52,557. These people had been living in 70 different countries around the world, with the highest numbers returning from Sweden, Argentina, Canada, France and Germany (Elizabeth Lira and Brian Loveman eds. Políticas de reparación: Chile 1990-2004, Lom Ediciones, 2005).

## 拷問はここで行われる

作者不明  
チリ / 1978年ごろ



### Aquí se tortura

Here they torture

Anonymous  
Chile / c.1978

このアルピジェラに描かれているのは伝統的な背景だが、太陽がなく、山脈が荒涼としているのが暗示的である。実際、このアルピジェラ全体がとても暗く重苦しい雰囲気を持っている。おそらくは主題を反映してのものだろう。

このアルピジェラの作り手は、拷問を自分の個人的な経験として描いている。黄色い部屋に置かれた机の上で、彼女は拷問を受けている。彼女が自分の受けた拷問だけを描いていることは重要な点である。他の女たちの経験を語ることはできないと考えているのだ。作り手自身のとてもつらい経験が表現されている——彼女が他者に知ってもらいたいと感じている経験だ。アルピジェラでは珍しいことに、この作り手の女性は絹を用いている。おそらく、経験の過酷さを際立たせるとともに、記憶をより耐えられる何ものかに変えるためだろう。青い車はチリの秘密警察のものである。

また、拷問を加えている者と扉を見張っている者がみな女性だということも意味深い。独裁体制下のチリには何百もの拷問施設があった。男女混合のものもあったが、いくつかは性別ごとにわかれていた。この作品は、作り手が女性限定の拷問施設に収容されていたことを示している。

There is a traditional background for this arpillera but it is significant that the sun is absent and the mountains are bleak. In fact, the whole arpillera is very dark and sombre, a reflection, perhaps, of its topic.

The maker of this arpillera is depicting her personal experience of torture. In the yellow room, she is being tortured on the table. Significantly, she portrays herself on her own, as she does not think she can speak for other women's experiences. She represents her very personal and painful experience, which she wants others to know about. She uses silk, unusual in arpilleras, probably to contrast with the harshness of the experience and turn it into something more bearable to recall. The blue cars are those of the Chilean secret police.

Also significant in this piece is the fact that the torturers and the person guarding the door are all women. Chile had hundreds of torture centres during the dictatorship, some of which were gender specific while others were mixed. This work indicates that the maker was being held at a torture facility for women only.

## 拷問室

ヴィオレータ・モラレス

チリ / 1985年

### Sala de torturas

Chamber of torture

Violeta Morales

Chile / 1985



今回の展示の中でも、その見た目からぎょっとさせられる作品のひとつ。シンプルな黒布を背景に、このアルピジェラはチリの拷問の歴史について憚ることなく語っている。

拷問は扱いが難しい題材である。ヴァレクレポート（政治的収監や拷問に関する国内委員会報告書）によれば、ピノチェト政権時代に数千もの人が何らかの形の拷問を受け、そのうち35,868人が委員会に申し出た。このうち27,255人が拷問の犠牲者として正式に登録された。

このアルピジェラは、拷問の経験を生々しく描いている。人びとは非個人的に描かれ、彼らの容貌は確認できない。拷問という非人間的な経験が、一人ひとりの個人のみならず、意味ある集団によって生きられたものであることが、このように象徴的に表現されている。このアルピジェラを作った女性のなかに、過去について語り、忘却を否定する意欲があったことに気づかされ、実に印象的だ。日々の会話とアルピジェラの両方で再現される不変の信念である。

This is one of the most visually startling pieces in the collection. Set against a simple black background, this arpillera speaks unapologetically about Chile's history of torture.

Torture is a difficult subject. According to the Valech Report (The National Commission on Political Imprisonment and Torture Report), thousands of people were subjected to some form of torture during Pinochet's regime of which 35 868 approached the Commission. Out of this group, 27,255 people were officially registered as victims of torture.

This arpillera graphically depicts the experience of torture. It shows these people in a dehumanised way, their features not recognizable, and symbolizes this inhuman experience as not only lived by single individuals, but by significant groups of people. It is striking to notice in the woman who made this arpillera her willingness to talk about the past and to deny oblivion. Constants that reappear both in conversations and arpilleras.

## 平和、正義、自由

作者不明

チリ / 1970年代後半

### Paz, justicia, libertad

Peace, justice, freedom

Anonymous

Chile / Late 1970s



山脈と輝く太陽を背景に持つ昔ながらの様式に回帰しているが、非常に政治的なアルピジェラ。この作品も、行方不明者の身内による運動を描いている。彼ら抗議する者たちは「平和、正義、自由」を訴え、さらに自分たちの運動についてのリーフレットを携えている。別の抗議者は、自分たちのメッセージに注目を集めるため、パトカーの前でシンバルを打ち鳴らしている。

この作品には、行方不明者の苦しみも文字通り縫い込められている。暗い灰色の背景は、行方不明になった一人の男性のズボンから作られたものだ。また道路をあらわす格子模様の生地は、やはり行方不明者になった別の人物のシャツから作られている。

あざやかな色彩を使い、行方不明者を代表的に表すとともに個人化する手法を通じて、この作品は政治的抑圧に対する挑戦をおこなっている。

This arpillera, from the late 1970s, returns to the classical style of mountains and bright sunshine in the background but is very much politically charged. Once again it depicts the campaigns by the loved ones of the Disappeared. Protesters call for "Peace, Justice, Freedom", more carry leaflets with campaign information, while others clash cymbals in front of police cars to get attention to their message.

The plight of the Disappeared is also literally sewn into this piece, with the dark grey background being made from the trousers of a disappeared man, and the checked fabric of the road from the shirt of another one of the disappeared.

The vibrant colours and the personalisation of the representation of the Disappeared in this piece make it a particularly defiant expression against the political repression which inspired it.



## 貧困地区での日々

レコレタのワークショップ

チリ / 1983 年ごろ

### Vida cotidiana en una población

Daily life in a poor area

Taller Recoleta

Chile / c.1983



アルピジェラとしては一般的な主題を色鮮やかに描いているが、並外れた大きさのために印象的な作品。遊んでいる子どもたちを含め、日々の暮らしを忙しく営む貧しい人びとが描かれており、それじたいが重要な活動であることがしっかりと表現されている。全体として、自分たちをとりまく状況を受け入れ自信を持って暮らしている人々の姿に感銘を受ける。焦点となるのは果物と野菜の売店で、バナナとぶどうが吊るされ、キャベツと他の果物が台に置かれている。値札が小さく貼られているのも見える。人びとは、駐車しているトラックから自分たちの家のドアの中へと品物を運び入れているようだ。

アルピジェラについてどう考えるかと聞かれ、チリの有名なフォークシンガー、ピオレータ・パラは「アルピジェラは描かれた歌のようだ」と答えた。では逆に、アップリケの人形に如才なく満たされた、これら日常生活の物語を、歌っている絵画のようだと言うことはできるだろうか？

The colourful scene depicted in this arpillera is a common theme, though its big size makes it unusual and striking. It shows poor people busily engaged in everyday activities, including children at play. It establishes an air of purposeful activity. The overall impression is of people who accept their situation and get on with life positively. The focal point is a fruit and vegetable stall with bananas and grapes hanging and cabbages and other fruit on the counter. There are even little price stickers on the produce. Many people seem to be carrying goods away from the stationary lorry to the open doors of their houses.

When asked her opinion about arpilleras, the famous Chilean folk singer Violeta Parra replied: "Arpilleras are like songs that you paint." Can we in turn imply that these narratives of daily life, peopled so cleverly by appliqued dolls, are like paintings that you sing?

## 孤独なクエカ

作者不明

チリ

### La cueca sola

Dancing cueca alone

Anonymous

Chile



このアルピジェラは「拘禁・行方不明者の会」のワークショップのひとつが作成したもので、1991年にサンチャゴで入手された。製作された時期は、おそらく独裁体制が終わる以前の1980年代後半と思われる。チリの伝統的なダンス「クエカ」をパートナーと組まず一人で踊る女たちの姿を描くことによって、行方不明者たちの不在を痛々しく表現した作品である。愛する人々と踊る代わりに、女たちの衣服には彼らの写真がピンで留めてある。こうした不在の感覚とともに、女たちは歌い、踊る。それは彼女たちの不屈の精神と希望の象徴なのだ。

この作品もまた、伝統的な様式にとらず、山脈と太陽を取り去った屋内の場面となっている。多くの作品が持つあざやかな色彩を欠いてはいるが、抵抗のメッセージは他の作品に劣らず印象的である。

Made by one of the Association of the Detained and Disappeared workshops, and obtained in Santiago in 1991, this arpillera was probably made sometime in the late 1980s before the dictatorship ended. The absence of those who had been disappeared is portrayed poignantly here in the figures of the women dancing the traditional Chilean dance, "la cueca", without partners. In the place of their loved ones, the women have pinned photos of them to their clothes. Even with these absences the women sing and dance, symbolising their fortitude and hope.

This piece again does not follow the traditional style and takes the scene indoors away from the mountains and sun. While this arpillera lacks some of the flamboyant colours of many of the other pieces, its defiant message is no less striking.

## 子どもたちはどこ？

作者不明

チリ / 1979年

### ¿ Dónde están nuestros hijos?

Where are our children?

Anonymous

Chile / 1979



連帯ヴィカリア（「連帯の司祭館」、サンチャゴ大司教直属の人権組織）のワークショップで作製されたアルピジェラ。製作された年がわかるのは、このアルピジェラの裏面にポケットがつけられており、その中に手書きのメッセージが入れられていたためである。メッセージからは一人の苦悶する母親の肉声が聞こえてくる。彼女はこのメッセージを通じて自分の絶望をわたしたちに伝えるとともに、国家による抑圧と人権侵害のなかで同様の衝撃的な状況におかれている、すべての女たちの名のもとに言葉を発している。

「この作品のように、わたしたちの子どもたちは『ディナ（政治犯にかかわる秘密警察）』の監視下におかれているかもしれません。そしてわたしたち母親は、ある日子どもたちのことを聞きおよんで泣き悲しむのです。悲嘆に苦しむ一人の母親より、チリ、1979年。」

ここには山脈もなければ、アルピジェラの特徴である太陽もない。一人の悲しむ母親がおり、もう一人の女性とともにひざまずいている。ハートの形をしているものは、警察に追われる多種多様な人びとの手を想像的に表現したもの。巨大な目がすべてを見ている。平和の鳩は空へと舞い上がらず、地面へと落ちていくかのようだ。

This arpillera was made in 1979 in Santiago de Chile, in one of the workshops at the Vicaria de la Solidaridad. It was acquired by Jacquie at a solidarity sale while working for Oxfam in the early 80s. We can confirm the date when it was made, as it has a handwritten message in a pocket placed at the back of the arpillera. It was articulated by an anguished mother who shares with us her despair and, at the same time, speaks in the name of all the other women in the same dramatic situation, at that time of state repression and human rights' violations.

"This represents our children that might be like that, under the eye of the 'dina' (political secret police), while we – the mothers – cry to one day hear about them. An anguished mother in pain, Chile, 1979"

This arpillera does not show the mountains, nor has the characteristic sun; it places the crying mother kneeling with another woman. In the shape of a heart are the manifold hands as imagined by her, followed by police men and two big eyes watching it all. The peace doves are not flying up to the sky; they seem to be falling to the ground.

## 手の届かない価格

作者不明

ペルー / 1985年ごろ

### Los precios están por las nubes

Prices are sky high

Anonymous

Chile / c1985



このペルーのアルピジェラは、リマの有名なワークショップの一つで作られた。このワークショップは、政府軍とセンデロ・ルミノソ（「輝ける道」）との間で戦争が行われていた困難な時期に設立されたもので、現在も、女たちが女たちのために創り出す場として存在している。このワークショップは女性が家族を支えるための場でもあった。ときに女たちは家庭内で唯一現金収入を得る者であったためである。

このアルピジェラは、アンデス山脈奥地にある小さな村の野外での行動を描いている。女たちのグループが地面に座っている。全員が黒髪で伝統的な衣装を着ている。彼女たちは小さな土地で作った生産物を売っているように見える。毛布やショールとしても使われる伝統的な織物の上に、何個かの卵が置かれている。次のように書かれた横断幕が掲げられている。「わたしたちは飢えている」、「わたしたちが何をしているのか？ 十分なお金がないのだ。」

背景には山脈があり、太陽は輝いている。雲が空高く漂っているのが見える。それぞれの雲には、生活必需品ではあるけれども彼女たちの手には入らない、砂糖、油、米、牛乳などの品物の名前が刺繍されている。

This Peruvian arpillera was made in one of the well-known workshops of Lima. It was set up during the hard times of the war between government forces and Shining Path. It still exists as a space created by and for women. It helps them to support their families, sometimes being the only earner.

The action in this arpillera takes place in the open air in a small country village up in the Andes. A group of women, all with black hair and wearing traditional clothing, are sitting on the ground. They seem to be selling products they produce in their small holdings. They have a few eggs on a piece of traditional weaving, often used as blankets or shawls. They are holding banners that read: 'We are hungry', and 'What do we do? We do not have enough money.'

The mountains are in the background and the sun is shining. We can see a few clouds high in the sky. Each cloud has stitched on it the name of one of the products that has become unaffordable for them and which are part of their basic needs: sugar, oil, rice, milk.

## 断水

作者不明

チリ / 1980 年ごろ

### Corte de agua

Water cut

Anonymous

Chile / c.1980



山脈と真っ赤に輝く太陽を描くという、伝統的な様式へ回帰したアルピジェラ。この様式にみられる楽観性は、本作品に描かれているような、独裁体制に抗議した人びとの勇気と柔軟性とも共鳴しあうものである。

当時、反政府の異議申し立てを脅迫的に止めさせる目的で、政府は貧しい人びとへの水の供給を絶った。それに対する貧民たちの対応が、ここには描かれている。政府の仕打ちをものともせず、女たちは近くの中産階級の人びとのところにバケツを持ってゆき、水をわけてくれるよう頼んだ。右下角に見える貯水タンクを、女たちはその日のうちにいっぱいにして、自分たちの地域に持ち帰った。

この情景は、自分でも気づかなかった力が内部から引き出される感覚を描いている。それはアルピジェラ製作によって作り手たちが得た感覚でもあった。

This arpillera, from around 1980, returns to the traditional style with the depiction of mountains and a bright shining red sun. The optimism of this style is reflected in the scene, which portrays the courage and resilience of those who protested against the dictatorship.

The piece represents the response of the poor who had their water supply cut off by the government in order to bully them into stopping their anti-government protests. In defiance, the women from these poor areas carried buckets to their middle-class neighbours and asked them for water. In the bottom right hand corner you can see the water tanks, which the women filled that day in order to carry water back to their communities.

The scene reflected in this arpillera illustrates the sense of empowerment which the arpilleras gave to their creators

## さようなら、ピノチェト！

作者不明

チリ / 1980 年ごろ

### ¡Adiós Pinochet!

Good bye Pinochet!

Anonymous

Chile / c.1980



女たちは貧しい隣人同士で集って、意見を言いあったり、自分たちや地域からよりよき生活を奪っている情勢に対抗したりしてきた。小さな家々には電気が来ておらず、そのため電線を電力源に接続して盗電が行われている様子から、この地域の貧しさが見てとれる。けれども家々は明るい色で描かれており、山々や太陽は変わらずそこにある。

ここには二つのグループがいて、どちらも横断幕を持っている。それぞれ「独裁者は出ていけ!」、「さようなら、ピノチェト!」と書いてある。

このアルピジェラは連帯ヴィカリアの援助を受けた、あるワークショップで製作された。ピノチェトの独裁体制に対する国際連帯活動のなかで購入されたものである。

ファンダシオン・ソリダリダードのウェブサイト (<http://www.fundacionsolidaridad.cl>) からは今でもアルピジェラが購入できる。

Women have gathered in the streets of a modest neighbourhood to express their opinion and confront the situation that they see is keeping them, and their community, from having a better life. We can see that they are impoverished as they have no electricity supply in their little houses and have to steal it by attaching electrical cables to the source. In spite of this, they depict their homes with bright colours and the classical mountains and sun are there.

They are divided into two groups, each carrying a banner. One says: Out Pinochet! The other reads: Good bye Pinochet!

This arpillera was made by one of the workshops run and supported by Vicaría de la Solidaridad. It was acquired in the context of international solidarity against Pinochet's dictatorship.

You can still get arpilleras from [www.fundacionsolidaridad.cl](http://www.fundacionsolidaridad.cl) and other groups

## サンチャゴでのビラ配り、1979年

作者不明

チリ

### Panfleteando en el 1979 en Santiago

Leafletting in Santiago in 1979

Anonymous

Chile



このカラフルでいくぶん子どもっぽいアルピジェラは1970年代後半のもの。活動家たちが通行人やドライバーにビラを配布し、行方不明者について注意を喚起している情景が描かれている。

アンデス山脈を描く伝統的な様式がここでも用いられており、この作品ではカラフルな布の切れはしが使われている。しかし、太陽はまだ輝いていないようだ。おそらく、危険がまだ蔓延していることを表しているのだろう。大きな家々と木々が表現しているのは中産階級地区であり、他のアルピジェラに見られるようなスラム街ではない。活動家たちは自分たちのメッセージを届けるため、そこに立ち入る勇気を出しているのだ。この作品は、隠された不快な真実を暴く、不断の試みを描いている。社会のなかのある種の人びとを苦しめており、その他の人びとがしばしば無視することを選択する真実を。

This colourful and somewhat childlike arpillera from the late 1970s, depicts a scene where campaigners are distributing pamphlets to pedestrians and drivers to raise awareness about the Disappeared.

Again, the traditional style of the mountains is represented, here using a myriad of colourful scraps of cloth. The sun, however, is not yet seen to be shining – perhaps representing the dangers that still prevailed. The large houses and trees indicate that the campaigners have been emboldened to go into middle-class areas to carry their message. This is not the shanty town of the previous arpillera. It illustrates the relentless attempts made to reveal the unsavoury hidden truths which plagued certain groups within the society, truths which others often chose to ignore.

## 倒れていった者たちへ

作者不明

チリ / 1970年代後半

### Homenaje a los caídos

Homage to the fallen ones

Anonymous

Chile / Late 1970s



アルピジェラの作り手を援助するために、NGO や教会団体によって販売されていた作品の一つ。

この作品のあざやかな色彩は、貧困と悲嘆と抵抗についての物語の深刻な雰囲気覆いかくしている。この政治的なアルピジェラも、山脈と太陽という伝統的な様式を欠いており、代わりに前景には主に黒色が使われている。

背景では、貧しい村人たちが頭上の電線から自分たちの家まで電気をこっそり引き込んでいる。前方では、行方不明者に捧げられたろうそくが小道に沿って並んでいる。歩道に身を投げ出して抗議する女たちがおり、他の女たちは、ろうそくを携えパンフレットを配っている。木の下では、人びとが「倒れていった者たちへ」と書かれたプラカードを掲げている。

This arpillera from the late 1970s was one of those sold by NGOs and church organisation to support the arpilleras (the makers of arpilleras).

The piece's bright colours belie the grave tone of the story that is being told of poverty, grief, and protest. Again, this political arpillera lacks the mountains and sun of the traditional style and instead has a mainly black foreground.

In the background, poor villagers are tapping electricity from the overhead wires to their homes; in the front of the picture the pathway is lined by candles marking the disappeared; women are thrown on the road in protest; others carry candles and hand out pamphlets with information, while the group under the tree carry a placard saying "Homage to the Fallen" .

## 大飢饉

ヘレン・ヘロン  
アイルランド

### The great famine

Helen Heron  
Ireland



2010年のベルリン・チリ大使館のアルピジェラ展覧会のために特別に作られた作品。ここに描かれているのはアイルランドの暗い過去のひとつ、1840年代の大飢饉である。100万人の人びとが飢えと病のために亡くなり、さらに100万人がアイルランドの外へと移住した。この飢饉は、ジャガイモ収穫が何度も失敗したあげくに起こったものだった。当時、貧しい人びとの食生活は完全にジャガイモに依存していたのである。

ヘロンはこのアルピジェラを通じて、飢饉にひどく苦しめられた地域のひとつ、コーク州バントリーと彼女自身のかかわりを想像力ゆたかに表現している。バントリーは彼女の先祖のふるさとだった。この作品は山と海の風景をあらゆる織物が幾層にも重なって作られており、その層がバントリーを含むアイルランドの地図の上に重ねあわされている。飢饉にまつわる多くのイメージも描かれている——たくさんの貧者が死んだ救貧院、アメリカ合衆国への移民を運んだ「棺桶船」、燃やされる丸木小屋とそこから追い出された借家人、ジャガイモを集めようと地面を這いずる女性、そして死者を運ぶ行列。

This piece was specially made for the arpilleras exhibition at the Chilean Embassy in Berlin in May 2010. It illustrates a dark period of Ireland's past, the Great Famine of the 1840s. During this catastrophe, one million people died from starvation and disease, and a further one million emigrated. The famine occurred after the repeated failure of the potato crops upon which the poor depended almost entirely for food.

Heron uses this arpillera to imaginatively voice her own connection to one of the areas worse affected by the famine – her ancestral home of Bantry in County Cork. The piece is made up of layers of fabric depicting a mountain and sea view superimposed onto a map including Bantry. A number of quintessential images of the Famine are included – the workhouse (where many of the destitute died), the 'Coffin Ship' (used to transport emigrants to the USA), the burning cabin with its evicted tenants, the woman scrambling for potatoes in the earth, and a funeral procession.

## ザンビアでの日々

ファティマ  
2010年ごろ

### Daily life in Zambia

Fatima  
c.2010



このキルトは2010年7月、本展キュレーターが南アフリカのマーケットで作り手ファティマから入手したもの。アフリカ・ザンビアでの日々のお話を描いたこのアププリケの壁かけも、今回の大阪での展覧会と深い関連をもっている。マージョリー・アゴシンがコメントしたように、本展では「ひとつひとつの作品が、切実に個人的なものであると同時に普遍的なものでもある」。アルピジェラと他の裁縫作品の間にあるつながりとは、縫い手である女たちが、自らの生活を描くために縫いものの伝統に回帰していったところにある。これは重要な点だ。

6つの情景のうち1つには壺が描かれているが、この中には折りたたまれた手書きの紙切れが入っていた。そこには作り手ファティマがわたしたちに知ってほしかった彼女の生活が見てとれる。

ティムエと妻のツサラは家でくつろいでいた。  
彼女は市場に行った。  
ツサラはアフリカの医師から香草をもらった。  
小屋の外に座り料理を作る。  
彼らは友達を訪ねるところだ。  
彼らは水の壺を持って家へと向かっている。

This wall hanging appliqué with narratives of daily life in Zambia, Africa, seemed relevant to include in this Osaka exhibition. As Marjorie Agosin said in a comment regarding the background documents to this exhibition; "Each piece is profoundly individual and universal at the same time". It is important to note the connection between arpilleras and these textiles, as the women who stitched them return to their sewing traditions to portray their daily lives.

A folded scrap of handwritten paper found in a pot of one of the six scenes, shares with us what Fatima seemed to want us to know about her life.

Timue and wife Tsala relaxing at home.  
She is going to the market.  
Tsala is receiving the herbs from the African doctor.  
Seated outside the hut, cooking food.  
They are on the way to visit friends.  
They are heading home carrying pots of water.

## 政治犯に自由を

作者不明

チリ / 1985 年ごろ

### Libertad a los presos políticos

Freedom for the political prisoners

Anonymous

Chile / c.1985



この作品のようなアルピジェラを作った女たちにとって、裁縫の技術は、闘争やその記憶とともに毎日生きていくための手段だった。マージョリー・アゴシンが言うように、「アルピジェラの作り手にとって、政治的な出来事と自分たちの日々の生活は、分かちがたく結びついていた」。

政治犯の処遇を改善するための闘いは、社会的にとっても重要なものだった。このアルピジェラで表現されているのは、牢獄の前で抗議行動をおこない、政治犯の解放を強く要求する女たちのグループである。

ここに描かれているような行動は、軍事政権への国際的な圧力をもたらし、政権内部に不和をひきおこして、1988年、ピノチェト将軍が拷問に反対する協定に署名することにつながった。さらにこれによって、1973年から1990年の統治期間中に人権侵害をおこなったとして、スペインがピノチェト将軍を告訴することが可能になった。(抄訳)

The women who made this kind of arpillera have resorted to their textile skills as a means by which to live with conflict and its memory on a daily basis. As Marjorie Agosin (2008) quotes: "For the arpillera makers the political events of their country and their daily lives became inseparable" ("Tapestries of Hope, Threads of Love", Rowman & Littlefield).

The struggle for better conditions for political prisoners became extremely relevant. This arpillera shows a group of women defiantly demanding the release of the prisoners inside the prison they are protesting in front of.

Actions depicted in arpilleras like this one brought international pressure on the Junta, and internal disagreements within it, made General Pinochet sign the convention against torture in 1988. In turn, this allowed Spain to indict General Pinochet on charges alleging human rights violations during his regime from 1973 to 1990.

The powerful effect of this type of political expression was not recognised at first by the military. Ariel Zeitlin Cooke explains: "Ironically, war textiles are largely disregarded by modern military authorities because of their feminine connotations and can therefore be a relatively safe forum for dangerous or provocative ideas" (Weavings of War). When the Chilean military finally recognised the power of the arpilleras, they condemned these works as subversive materials and if found they would have been destroyed and stopped at Customs before leaving the country.

## 大気汚染はもうたくさん

作者不明

チリ / 1985 年ごろ

### No más contaminación

No more pollution

Anonymous

Chile / c.1985



この作品は、ロバート・ミラーが1990年代はじめにチリを訪れたとき、連帯ヴィカリアで入手したもの。ミラーはのちにチリの女たちの抵抗について文章を書き、チリ訪問中に彼が目にし、経験したことを述べている。

この展示作品を通じて、わたしたちは25年前のサンチャゴ近郊の貧民区における生活を目にする。コミュニティの人びとは、自動車と公共交通による大気汚染と悪臭に悩まされ、行動を起こしている。「スモッグはもうたくさん」と書かれた横断幕を掲げて、自分たちのおかれた状況を告発している人びとがいる。女たちの何人かは、口と鼻をマスクで覆っている。

この作品は、大気汚染にまつわる現在の世界的な問題を映し出すものでもある。

同時に、困難にもかかわらず団結するコミュニティを、この作品は映し出している。

This piece was acquired at the Vicaría de la Solidaridad by Robert Miller when he visited Chile in the early 1990s. He later wrote a paper on Chilean Women's Resistance which gives an account of what he saw and experienced while there.

The arpillera on display opens a window into the life of a poor shantytown in the suburbs of Santiago 25 years ago. Affected by pollution and the fumes of cars and public transport, the community is taking action. Some are denouncing the situation through a banner that reads: 'No more smog'. Some of the women are covering their mouths and noses with a mask.

The piece mirrors the present global concern about pollution.

Overall, it reflects a community united against the odds.